

P-149

脳卒中再発予防のための退院指導の取り組みについて

高松赤十字病院 看護部 本7看護室

○宮本 舞子、亀山裕加里、伊青みどり

【はじめに】全国的に脳卒中の患者数は増加しており、2020年には300万人を超すと予想されている。特に脳卒中のうち脳梗塞の再発率は高く、5年間で30～50%の再発があるといわれている。そして再発時は初回よりも重症化し、介護が必要になることが多い。本病棟での23年度の脳卒中の入院患者数は178名で、前年度の107名と比較し60%増している。そこで私たちは脳卒中の再発予防、そして再発の早期発見のための介入が必要と考えた。まず再発予防のための退院指導の充実をはかる目的で退院指導のパンフレットを作成し、運用にあたってのチェックリストを作成した。また、軽症脳卒中患者の退院後、本院に通院の患者には、初回外来面接を行っている。現在病棟でおこなっている退院指導のとりくみについて報告する。

【退院指導パンフレットの紹介】指導の際には情報収集をし、患者本人にも入院前の生活を振り返ってもらうことで退院後の生活改善への動機づけを行うようにした。あわせて指導内容の要点をまとめた、読みやすく掲示しやすい高齢者用のパンフレットを作成した。

【初回外来面接・継続看護の取り組み】本院では退院患者へのフォローアップとして必要であると考えられる場合、退院後初回外来時に病棟看護師が面接を実施している。看護師は患者が退院する前に情報収集するとともに入院中の患者の様子を振り返り、カンファレンスで話し合い用紙に記入しておく。患者が実際に退院してからの生活について振り返り、看護師が適宜指導を行うことで意識変容をねらい、脳卒中の再発予防につなげている。初回外来面接の際に実際の生活の様子を確認し、必要時指導や医師への相談を行っている。

P-151

化学療法を行いながら仕事復帰するためのアプローチ

足利赤十字病院 看護科

○遠藤美貴子

【目的】入院にて初回化学療法を行い、今後通院治療を受ける患者の仕事復帰に対する思いを明らかにする。

【対象と方法】シングルマザーで仕事を持ち化学療法を受ける子宮頸がんの患者を対象とし、半構成的面接を行った。面接内容の逐語録から、ボディイメージと仕事復帰に対する内容をマスターの概念及び構成要素の定義から対象ごとに抽出分類し、カテゴリー化した。

【倫理的配慮】担当医師より紹介を受けた後に、研究の趣旨および研究で得られたデータは本研究以外に使用しないこと、匿名であることを紙面上と口頭で説明し同意を得た。

【結果】1)確かさ：「急にお腹が痛くなって緊急手術して、組織の結果がと言われて抗がん剤をして髪の毛が抜けるとか吐き気が出るとか言われたけどどうなっちゃうの。今は吐き気が辛い。」との言葉が聞かれた。しかし、1週間後は「吐き気が落ち着いてきたから大丈夫そう。」と語った。2)変更：TP療法day5より悪心が軽減しA氏は「少しずつ食べられるようになって力がついてきた気がします。ベッドで横になっている時間も少なくなりました。」3)受け入れ：「病気になるってなんで自分がと暗くなってばかりいた。家族も子供も大切と今まで以上に感じる。まだまだ出来ることはありますよね。」4)拡がり：「子供の成長を見るのも自分で仕事を続けることも自分のペースで頑張っていきます。」

【考察】今後起こりうるボディイメージの変容に不安を感じながら仕事は続けたい思いを支えにしていた。患者の思いを尊重しながら治療継続できるように支援していく必要があると考える。

P-150

心臓血管外科術後の患者に対する効果的な退院指導の検討

高松赤十字病院 看護部

○山下明花莉、谷本 麻美、田井 陽子

〈はじめに〉本病棟では心臓血管外科術後の患者に対して、退院前に看護師がパンフレットを用いて退院指導を行い、初回外来受診時に看護相談を行っている。しかし、指導内容に沿った自己管理ができていない患者がおり、個別性に合わせた退院指導の必要性を感じた。そこで、退院後の問題点を明確にして自己管理が継続できるような効果的な退院指導を検討した。

〈事例・結果〉A氏 認知症の夫がおり、退院後は夫の介護を行いながら内服や血圧測定等、自己管理を両立する必要があった。今までは血圧測定はしていなかったが、入院中より自己測定を行い体重と一緒に毎日記録をつけるよう指導を行った。退院後も継続して測定でき、夫の介護もできていた。B氏 周囲に対して依存のかつ自己否定的な言動が多かったため、患者の努力を認め、主体的にリハビリテーションを進められるように関わった。それにより行動変容を起こすことができ、自己管理の継続につながれた。妻の協力も得られると良かった。C氏 術後の内服は看護師からの説明や薬剤師による服薬指導により自己管理できていた。しかし、本人からは複数ある内服薬の効果について詳しく知りたいという言葉があり、本人の理解状況に応じた介入が必要であった。

〈考察〉自己管理における患者個々の問題はそれぞれ異なり、日常生活や自己管理への思い等を把握し、ニーズや退院後の目標を明確にして患者に合った指導を行うことができた。患者と共に目標を立て、入院中から退院後の生活を見据えて取り組んだことで、退院後も自己管理を継続することにつながることができた。さらにキーパーソンへの働きかけや他職種の協力を得ることも必要である。

P-152

経口挿管による口唇潰瘍形成の減少に向けての取り組み

旭川赤十字病院 ICU・CCU

○内田 沙紀、伊藤さやか、半田 結香、山本真由美、大塚 操、鈴木 智子

【目的】A病院ICU・CCU（以下ICU）では、挿管チューブによる口唇潰瘍形成の予防に取り組んできたが、口唇潰瘍が散見されていた。そこで、過去の口唇潰瘍形成患者（以下、潰瘍形成患者）とその背景を調査し、減少に向けた課題の明確化と取り組みについて評価することを目的とした。

【研究方法】1、H19～23年度の褥創発生患者65名中の潰瘍形成患者の割合及び発生率 2、H22年度の挿管患者123名の褥創発生関連因子（以下、関連因子）の集計と2群（潰瘍形成群・非潰瘍形成群）比較（フィッシャーの直接確率テスト・t検定）

【結果】1、褥瘡発生患者65名中、潰瘍形成患者34名(53%)、潰瘍発生率は平成19年度4.3%、平成20年度6.7%、平成21年度4.9%で、平成22年度では11%と上昇し、平成23年度は1.7%だった。 2、潰瘍形成患者のTP・Alb・Hbの平均値は、入室・潰瘍形成時ともに基準値より低く、さらに関連因子5項目（Alb、TP、カテコロールアミン、末梢循環不全、皮膚の脆弱）に関しては50～90%の潰瘍形成患者が該当した。平均挿管日数は潰瘍形成群11.4日、非潰瘍形成群4.5日、2群比較において有意差を認めた。

【考察】ICUに入室する経口挿管患者は低栄養、末梢循環不全、皮膚の脆弱、カテコロールアミンの使用を背景に口唇潰瘍のハイリスク状態にあるため、予防に向けた取り組みは、看護の質の向上につながる。挿管管理の長期化で潰瘍を形成しやすい傾向があり、挿管直後から統一した予防策の徹底とケアの継続が課題である。また今回、挿管チューブの固定を上顎の4面固定法に変更し、潰瘍発生率の減少につながり効果的であったと考える。